

# 日常的な母子分離場面における 母親の対児行動に関する縦断研究

— 幼稚園登園場面における母親の行動分析から —

権 田 あずさ

(2012年10月2日受理)

Longitudinal Study of Maternal Behavior in Daily Mother-Child Separation  
— A behavioral analysis of mothers dropping their children at kindergarten —

Azusa Gonda

**Abstract:** The present study attempts to elucidate the way in which mothers behave and express their affection to their children of ages 3-5 years. Observations were carried out when participants dropped their children at kindergarten in the morning. The following results were obtained: (1) When their children were three-years old, mothers appeared to nurture them and overtly express affection prior to leaving. (2) Regardless of their child's age, the overall amount of expressed affection remained consistent among participants. (3) In both age groups (3 and 5 years), mothers with daughters were noticed to express more affection than mothers with sons.

Key words: Leaving children at kindergarten in the morning, Mothers' behavior toward children, Behavioral analysis, Longitudinal study

キーワード：登園場面，母親の対児行動，行動分析，縦断的研究

## 1. はじめに

アタッチメントとは、危機や不安というネガティブな情動が喚起されたときに、それを養育的、保護的な立場にある者とくっつく、あるいは、絶えず接触しているということによって、低減・調節しようとする行動制御システムのことである<sup>1)</sup>。そのため、アタッチメントは、まず、母親といった養育者との間で生まれ、その後、他の人との結びつきを可能とするのである。親と子が、相互にアタッチメントを形成していく要因

として、重要な役割を果たすと言われているのが、親子の間で交わされる身体接触である。われわれが精神的健康、身体的健康の両方を得るには、親子の身体接触が大きな鍵であり、とりわけ、幼少期の母子の身体接触の重要性を指摘する研究者は少なくない。アカゲザルの代理母実験を行った Harlow<sup>2)</sup> は、「アタッチメントの形成要因として、接触経験が重要な役割を果たしている」とし、ヒトの母子関係の実証的研究を行った Ainsworth<sup>3)</sup> も「親子のアタッチメント形成に最も重要なのは身体接触である」ことを指摘している。Morris<sup>4)</sup> や Argyle<sup>5)</sup> も、人間の感覚や人間関係における身体接触の重要性を指摘しているが、特に母子間では、身体接触は、母子の相互作用を促し親子関係の絆を形成する上で重要である<sup>6)</sup>。このように、われわれヒトの親と子の間で交わされる相互交渉のうち、特に

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：平田道憲（主任指導教員）、七木田敦、  
柴 静子、今川真治

身体接触は、親子の絆を深め、親と子の相互がアタッチメントを形成していく上で重要な役割をもつことが明らかにされている。

ところで、近年は多くの子どもたちが3年保育のために3歳から幼稚園や保育所などの集団保育施設に通っているが、そのような施設での生活においては、それまで大人との関係を中心に生活してきた子どもたちが、初めて家庭外で同年齢の子どもたちと社会的な関係を持ち、学童期から思春期へとますます重要性を増す仲間関係の基礎を形成していかなければならない。

アタッチメント理論に基づけば、子どもはまず家庭内で、主たる保育者である母親に対してアタッチメントを形成する。母親は子どもにとって新しい環境を探索するための安全基地 (secure base) として機能し、母親とのアタッチメントを根幹として、子どもは母親以外の他者との関係を築いていくことになる。家庭保育から集団保育への転換に際し、子どもは集団保育施設への入園 (入所) を機に、家族から教師 (保育者)、他児へと徐々にそのアタッチメントの対象を広げていかなければならない。アタッチメントの対象を複数もつことは、人が社会の中で生きていくために必要な適応プロセスであると言え、集団保育施設への入園 (入所) を契機とする、家族から他者へのアタッチメント対象の広がりは、子どもが社会に適応していく第一歩である。そのため、子どもが生まれて初めて集団の場に入っていく際、子どもにとっての基本的なアタッチメント対象である母親が、子どもに対してどのように関わっているかが、子どもが社会に出て行くためには重要である。

これまで、親子や家族の関係性などを知る研究では、親自身を対象とした質問紙調査が数多く行われてきた。近年では、質問紙調査と並行して、観察によるデータ収集も盛んに行われている (例えば、根ヶ山<sup>7)</sup>)。しかし、小島<sup>8)</sup>が指摘しているように、親子や家庭を扱う多くの観察研究において、その観察場面が家庭内や家屋内に限定されており、しかも実験的、非日常的であるため、生態学的な妥当性を欠くデータがその中心をなしているという点が問題である。また、現在も数多く用いられている事例研究は、対象の自然な場面をありのままに観察し分析することが可能である (例えば、小松<sup>9)</sup>) が、個別性が強いいため一般的傾向を導き出しにくい。

そこで本研究では、親子の自然でリアルな関係性を観察することができる場面の1つとして、幼稚園の登園場面に着目した。登園場面は、母子が物理的に離れなければならない場面であり、日常的に繰り返される

場面である。このような場面では、母親が子どもにとっての安全基地としての機能を十分に果たし、子どもが安心して集団の場に入っていけるような関わりかけを行うことが求められる。平井<sup>10)</sup>は、子どもの心に何らかの不安があるとき、子どもは母親に体で甘えてくると述べているが、登園場面では、母親との分離や集団へ入っていくことに対する不安を抱く子どもに対して、母親が身体接触を多く表出することが期待できる。登園場面での母親の行動特性を、日本と中国とで比較検証した高<sup>11)</sup>は、日本の母親は、子どもとの共同作業や間接的な分離表現を通して、子どもが自然に母親から離れ、集団に移行できるような、様々な対児行動を表出したと報告している。

本研究では、同じ母親を対象に、子どもの年少時と年長時の登園場面における対児行動を縦断的に観察することにより、子どもの年齢に応じた母親の対児行動の特徴を明らかにする。年少時の子どもは、家族以外のアタッチメント対象を広げる初期段階であるが、年長時の子どもはすでに複数のアタッチメント対象を持っていることが推察される。つまり、子どもがアタッチメント対象を広げていくプロセスに応じて、母親は身体接触を始めとする様々な対児行動をどのように表出しながら子どもを幼稚園へ送り出しているのかを、年少時と年長時において同じ母親の行動を比較することで明らかにすることが可能である。

## 2. 方法

### (1) 観察対象者

本研究の対象者は、2009年4月に3年保育で入園した園児20名 (男児10名、女児10名；レンジ3歳0ヵ月～4歳0ヵ月) の母親であった。このうち、日常的な園への送迎を父親が行っていた男児1名を除外し、さらに男児の中に1組の二卵性双生児がいたため、実際に研究対象としたのは18名の母親 (年少時平均年齢33.8歳；レンジ24～44歳) であった。これらのうち、年中児クラスへ進級する際に他の園へ転園した男児1名を除いた17名の母親 (年長時平均年齢36.2歳；レンジ26～46歳) を年長時の研究対象とし、年少時と年長時との比較を行う際には、年少時のデータからこの男児の母親のものを除外した。また、対象とした母親の子どものうち、第1子は9名 (男児3名、女児6名) であった。

### (2) 観察期間

年少時の観察は、入園式を除いた初めての登園を含む2009年4月13日から同年9月17日までの6ヵ月間に渡って行い、合計で50回の登園場面のデータ収集を

行った。

年長時の観察は、2011年6月14日から2012年3月14日までの9ヵ月間に渡って行い、合計で44回の登園場面のデータ収集を行った。

登園場面の観察時間帯は、年少時と年長時のいずれにおいても、園児が登園し始める8時40分頃から、通常すべての園児が登園を完了する9時20分頃までであった。そのため、1日あたりの観察時間は、約40分間であった。

### (3) 手続きおよび観察方法

年少時の本観察に先立って、本研究で研究対象とした園児が入園する前の2009年3月6日から同年3月17日の期間に、観察年度前年の年少児クラスに在籍していた子どもと母親を対象として、予備観察を行った。この期間を通して、年少児クラスに在籍する園児の登園の様子や、登園場面における母親の行動の一般的特徴を把握するとともに、観察に用いるビデオカメラの設置場所や撮影アングルの検討を行った。

本研究の対象とした園児の年少時の本観察では、観察者(筆者)は、撮影範囲に入らないようカメラの後ろ側に位置し、登園中の母子に影響を与えないように留意しながら、カメラで撮影できていないと思われる母子のやりとりをエピソードとして記録した。その後、ビデオカメラで撮影された映像を元に、母親の対児行動を分析するために用いる行動を抽出した。

年長時の観察に際しては、本観察に先立って、2011年4月14日から同年6月13日までの期間に予備観察を行った。予備観察では、年長児クラスに進級した園児の登園の一般的傾向を把握するとともに、年少時の分析に用いた母親の行動カテゴリーがそのまま利用できるかを検討した。予備観察の結果、年少時に分析に用いた母親の行動カテゴリーのすべてを年長時にもそのまま利用できることを確認した。しかし、各行動の出現頻度が極めて低いことから、年長時の本観察では、ビデオカメラを用いる必要はないと判断し、観察者(筆者)は、母子のやりとりが観察できる範囲に位置して直接観察を行うこととした。観察には、年少時に分析した行動カテゴリーを基にあらかじめ作成したチェックシートを用い、チェックシートに記載された各行動の生起の有無を記録した。年少時および年長時において観察を行った母親の行動とその定義を表1に示す。

### (4) 分析方法

本研究で研究対象とした幼稚園では、母親と子どもは一緒に各クラスの入り口付近までやってくるため、母子の分離は各クラスの付近で起こることになる。子どもの年齢によってクラスの入り口が異なるため、年少時と年長時とでは登園場面とみなす場面をそれぞれ

下記のように定めた。

年少時における登園場面は、母子が登園してきて、あらかじめ設置してあるカメラに母子のどちらかが映った瞬間から、母親が最終的に子どもから離れて、カメラに映らなくなった瞬間までとした。一方、年長時における登園場面は、母子のいずれかが幼稚園の門をくぐった瞬間から、母親が最終的に子どもから離れるまでとした。

年少時のビデオ映像を分析した結果、母子の登園にかかった平均所要時間は約4分30秒であり、母子の分離が起こるのは母子が登園してきておよそ4分後、母親が立ち去るおよそ30秒前であった。本研究では、母子の登園直後の1分間(登園時)と、母親が子どもから離れる直前の1分間(分離前)の2つの時間帯に分析対象を絞り、登園時と分離前の各1分間を合計した2分間を、年少時の登園場面とみなして母親の対児行動を分析した。総分析時間は、58,004秒(966.7分)であった。分析に際しては、各母子について、登園時と分離前のいずれも、またはいずれか一方のデータが記録できた日数を母数とし、2分間のうちに表1に示す行動が生じた日数の割合を算出した。それぞれの母子について分析が可能であった日数は、21日から44日であった。

一方、年長時の母親の行動分析においては、各母子について、登園場面の全過程が見られた日数を母数とし、そのうち各行動が生じた日数の割合を算出した。各母子の分析対象日数は、次の1組の母子を除き、25日から40日までの幅があった。1組の母子の分析対象日数は13日であった。これは、この母子が、園の門より外で分離をする場合が多かったためである。

## 3. 結果および考察

### (1) 登園場面における母親の行動の全体的特徴

#### 1) 登園場面で観察した母親の対児行動の種類

本研究で母親の愛情表出行動と定義した行動は表1に示す8種類の行動であった。年少時には、これら全ての行動が観察されたが、年長時では、このうち「なでる」、「手をつないでいる」、「スマイル」の3種類のみが観察され、他の5種類の行動は全く出現しなかった。また、年少時の「なでる」が、子どもの体の各箇所(頭や背中、肩など)に向けて行われたのに対し、年長時に母親が子どもをなでた箇所は頭のみだった。母親が子どもを抱きしめたり、抱っこしたりするなどの行動は年長時には全く見られず、母親が全身を用いて行うような身体接触は、年長時には大きく減少することがわかった。

表1 登園場面における母親の行動の分類およびカテゴリと行動の定義

行動の分類	行動カテゴリ	定義	
愛情表出行動	なでる	母親が、手を子どもの体に接触させたあと、ストロークすること。	
	スマイル	声を出さずに目を細め、口元を緩めて笑うこと。	
	手をつないでいる	親子が並行して互いの手を握り合うこと。	
	抱きしめる	母親が子どもをしっかりと抱くこと。移動を伴わない抱き。	
	顔と顔とくっつける	親子が互いの顔をくっつけ合うこと。	
	タッチング	母親が子どもの体の部位によらず、手によって触れたり、手を置いたりするような行動のこと。	
	抱っこをしている	母親が腕を回して子どもを支え持つこと。 移動を伴う場合もある。	
	腕を広げて待ち構える	母親が腕を広げて、子どもを迎え入れる体勢のこと。	
	世話行動	補助	母親が子どもの登園を手伝う行動。
		背中を押す	母親が、子どもが幼稚園のクラスへ入る準備を手伝うこと。 母親が子どもの背中に触れたあと、自分から遠ざかる方向に力を加えること。
発話(指示)		母親の希望などを子どもに対して伝え指図すること。 「帽子かけて」「靴脱いで」など	
手や腕を引っ張る		母親が子どもの手や腕をつかんで自分の方へ引くこと。	
指差し		母親が子どもに対して指を差して指示すること。	
服装を整える		母親が子どもの服装の乱れを直すこと。	
髪を整える		母親が子どもの頭髪の乱れを直したり、束ねたりすること。	
腕をつかむ		母親が子どもの腕を握り持つこと。	
腕をつかもうとする		母親が手を伸ばして子どもの腕をつかみにいくこと。	
手招きをする		母親が子どもを自分の方へ来させるために手で行う合図のこと。	
分離時特有の行動	手をふる	主に母子の分離の際に見られる挨拶行動や儀式的な行動。	
	タッチをする	母親が、子どもに対して手を左右に振り動かすこと。	
	分離のあいさつ	親子が互いの手のひら同士を触れさせること。 母親が子どもと別れるときのあいさつのこと。 「バイバイ」など。	
	握手をする	親子が対面して互いに手を握り合うこと。	
視線	● ちらりと見る	母親が子どものほうに瞬間的に(2秒未満)顔を向けること。	
	● 見守る	母親がある一定時間(2秒以上)子どもを見続けること。	
その他	● 他の母親と話す	母親が他の母親と会話をすること。	
	● 補助可能距離	子どもがクラスへ入る準備をしているとき、母親が子どもを手伝える距離にいること。	

注1: ●は年長時のみ観察した行動

本研究で世話行動と定義した行動は10種類の行動であった。年少時の登園場面には、これら10種類の行動すべてが観察されたが、年長時ではこのうち、「補助」、「背中を押す」、「発話(指示)」、「手や腕を引っ張る」、「指差し」の5種類のみが観察された。年少時に見られた「腕をつかむ」、や「腕をつかもうとする」、「手招きをする」などの行動は、子どもが登園してすぐに行うことになっているクラスへ入るための準備(上履きに履き替えたり、帽子を脱いで指定の場所へ掛けたりするなど)をする前に、子どもが砂場で遊んだり、クラスで飼っているうさぎにエサを与えたりしている場合に観察された。年長時にはこのような行動が全く見られず、その結果、母親が子どもの腕をつかんだり、手招きをしたりする必要はなかった。

以上のように、愛情表出行動と世話行動のレポーターが、年長時には年少時と比べて大きく減少した一

方で、本研究で分離時特有の行動と定義した4種類の行動のすべてが、年長時においても観察された。

## 2) 登園場面における母親の対児行動の出現割合

子どもに対する母親の愛情表出行動の出現割合を図

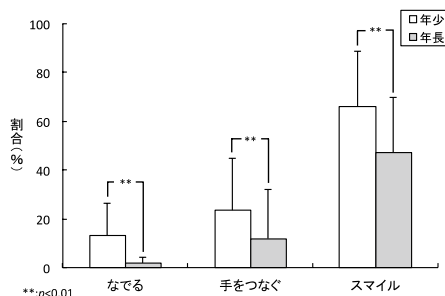


図1 年少時および年長時の登園場面における愛情表出行動の出現割合

1に示す。年少時に母親が子どもをなでた割合は約10%であり高くはなかったが、年長時にはさらに低かった ( $t=3.96, p<0.01$ )。母親が子どもと手をつないだ割合も、年長時には有意に低下した ( $t=2.99, p<0.01$ )。母親が子どもにスマイルを向ける行動は、年少時と年長時のいずれにおいても愛情表出行動の中では最も出現頻度の高い行動であったが、年少時よりも年長時の出現割合のほうが有意に低かった ( $t=3.87, p<0.01$ )。

登園場面において、母親が表出した世話行動の出現割合を図2に示す。ここでは、登園場面の観察中に、世話行動に分類される行動が1つでも観察された日数が、総分析日数に占める割合を出現割合としている(以下、分離時特有の行動の割合も同様)。

世話行動の出現割合は、年少時では80%を超えていたが、年長時では10%程度であり、年長時の出現割合は年少時よりも有意に低かった ( $t=16.20, p<0.001$ )。また、年少時よりも年長時のほうが、母親間のばらつきが大きかった(年少時: $SD=10.68$ , 年長時 $SD=20.12$ )。

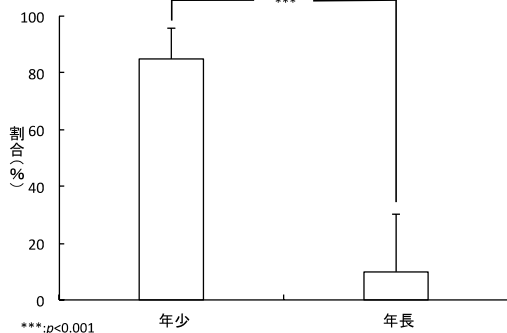


図2 年少時および年長時の登園場面における世話行動の出現割合

分離時特有の行動の出現割合を図3に示す。母親が分離時特有の行動を表出した割合は、年少時と年長時のいずれにおいても約50%であり、両者に有意な差は認められなかった ( $t=0.21, n.s.$ )。

1)と2)より、母親からの愛情表出行動と世話行動は、行動のレパートリーと出現割合のいずれにおいても、年少時から年長時にかけて減少、低下したことが明らかとなった。

これらの結果に対する要因として、何よりも子どもの成長や発達が挙げられる。3歳のころと比べて、5歳ではほとんどの子どもが自分1人でクラスへ入る準備をすることができるため、母親が必ずしも子どもを手伝う必要はなくなる。筆者は、年少時に本報告と同

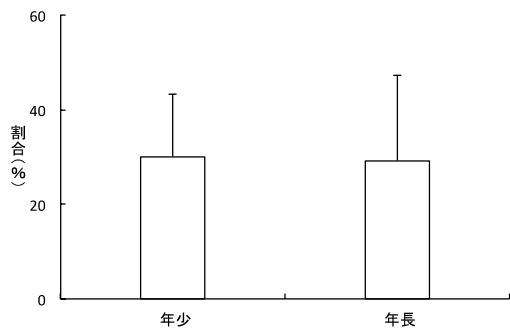


図3 年少時および年長時の登園場面における分離時特有の行動の出現割合

じ母親を対象に、母親が子どもに対して日常的に行っている世話行動の頻度を問う質問紙調査を行った<sup>12)</sup>。この調査から、子どもの着替えを手伝ったり、トイレを手伝ったりするような日常的な世話行動について、子どもが年少であっても、自分一人で行える場合には母親は子どもを手伝ってはいなかったことを明らかにした。このような傾向は、子どもの月齢が高い母親に多くみられたことから、子どもが成長、発達し、自分一人で行えることが増えるにつれて、母親は子どもを手伝わなくなると推察された。年長時の登園場面における母親の世話行動のレパートリーの少なさや出現割合の低さは、まさにそのことを表していると言える。

また、3歳という時期は、幼稚園への入園によって母子が初めて分離する機会が多く、母子のいずれにとっても登園場面での別れは容易ではなかったと考えられる。子どもが母親と離れることを嫌がったり、逆に母親が子どもと離れがたかったりすることが、年少時の母親の子どもへの様々な行動を増加させたのかもしれない。そのような場合、母親は子どもを抱きしめたり、子どもの背中をなでるなどして子どもをなだめたりに違いない。あるいは、子どもの腕をつかんだり、背中を押したりなどして子どもがクラスへ入るように促したことも考えられる。それに対し、ほとんどの年長の子どもは、登園して来てすぐに自分のやるべきことができ、母子の分離もスムーズに行われる場合が多かったことから、年長時の登園場面での母親のそのような行動は全く表出されなかったと考えられる。

年長の子どもが母親とスムーズに分離できたことは、年長の子どもが、母親から教師や他児へと上手にアタッチメント対象を切り替えることができたことを表しているとも考えられる。母親からの分離時特有の行動は、年長時においても、年少時と同じレパートリー、同程度の出現頻度であったことから、分離時に母子が交わす挨拶行動は、子どもがアタッチメント対

象を切り替えるためのスイッチのような役割をもった行動なのかもしれない。

(2) 子どもの性別にみた母親の対児行動

子どもの性別によって登園場面における母親の対児行動の出現割合に違いが見られるのかを調べるために、年少時と年長時のそれぞれについて、母親の行動の出現割合を算出し、子どもの性別に表2に示した。なお、「スマイル」および年長時の「手をつないでいる」の総分析日数は、その他の愛情表出行動の総分析日数と異なったため、「なでる」、「手をつないでいる」および「スマイル」はそれぞれ個別に分析を行った。対応のないt検定を行った結果、子どもの性別によって母親の行動に違いが見られたのは、年少時においては、愛情表出行動の「腕を広げて待ち構える」( $t=2.41, p<0.05$ )と、分離時特有の行動の「タッチする」( $t=2.41,$

$p<0.05$ )であり、いずれの行動も男児の母親よりも女児の母親が多く表出した。また、分離時特有の行動である「手をふる」についても、男児の母親よりも女児の母親のほうが高い割合で手をふる傾向があった( $t=2.08, p=0.054$ )。分離時特有の行動全体については、有意差は認められなかったものの( $t=1.75, p=0.100$ )、女児の母親のほうが、男児の母親よりも多く表出していると言えた。一方、年長時においては、愛情表出行動のうち「スマイル」についてのみ、子どもの性別による母親の行動に違いが認められ、女児の母親が男児の母親よりも高い割合でスマイルを表出した( $t=2.37, p<0.05$ )。

子どもの性の違いによる母親の対児行動の全体的な特徴を捉えるために、男児の母親と女児の母親の出現割合を比較したとき、一方が他方より明らかに大きい

表2 登園場面における母親の対児行動の出現割合

母親の対児行動	%			
	年少		年長	
	男児の母親 (N=8)	女児の母親 (N=10)	男児の母親 (N=8)	女児の母親 (N=10)
愛情表出行動				
なでる	13.6	13.1	2.5	1.4
スマイル <sup>3)</sup>	58.2	<b>72.5</b>	35.1	<b>* 57.2</b>
手をつないでいる	15.2	<b>30.4</b>	11.2	12.5
抱きしめる	1.8	<b>5.1</b>	0	0
顔と顔をくっつける	1.0	0.8	0	0
タッチング	43.9	<b>57.7</b>	0	0
抱っこをしている	2.4	<b>12.6</b>	0	0
腕を広げて待ち構える	0	<b>*</b> <b>1.1</b>	0	0
世話行動				
補助	81.3	87.8	<b>16.5</b>	4.6
背中を押す	57.1	57.2	<b>8.0</b>	0.9
発話(指示)	18.1	16.1	<b>6.1</b>	1.9
手や腕を引っ張る	<b>56.4</b>	41.9	<b>4.9</b>	1.5
指差し	4.0	6.0	<b>3.8</b>	0
服装を整える	46.5	48.5	<b>4.8</b>	1.9
髪を整える	2.0	3.4	0	0
腕をつかむ	1.6	<b>4.8</b>	0	0
腕をつかもうとする	11.9	<b>21.2</b>	0	0
手招きをする	1.9	2.8	0	0
手招きをする	<b>8.4</b>	5.9	0	0
分離時特有の行動	24.4	( $p=0.100$ ) <b>34.7</b>	22.5	<b>34.6</b>
手をふる	12.6	( $p=0.054$ ) <b>23.6</b>	14.2	<b>22.2</b>
タッチする	2.0	<b>*</b> <b>10.0</b>	2.1	<b>4.5</b>
分離のあいさつ	21.8	24.5	18.5	<b>21.9</b>
握手をする	1.3	1.1	0	0.0 <sup>4)</sup>
視線				
ちらりと見る	/	/	54.4	<b>67.7</b>
見守る	/	/	14.1	<b>20.5</b>
/	/	/		
その他				
他の母親と話す	/	/	23.1	23.7
補助可能距離	/	/	35.8	<b>41.2</b>
総分析日数	276	360	248	332
表情の総分析日数 <sup>2)</sup>	271	354	130	196

- 1) : 出現割合とは、総分析日数のうち、各行動が観察された日数の占める割合のこと。
  - 2) : 表情の総分析日数とは、総分析日数のうち、母親の表情が確認できた日数のこと。
  - 3) : スマイルの出現割合は、表情の総分析日数のうち、スマイルが見られた日数の占める割合のこと。
  - 4) : 1名の女児の母親に1回のみ観察された
- \* :  $p<0.05$

と判断したものについては表中に太字で示した。

年少時において、母親の世話行動は、男児の母親と女兒の母親にあまり差がみられず、男児の母親と女兒の母親はいずれも、年少時の登園場面に世話行動を行っていたことが明らかとなった。しかし、愛情表出行動と分離時特有の行動は、男児の母親よりも女兒の母親が多く表出する傾向があった。

年少時に筆者が行った質問紙調査において、女兒の母親は、子どもと離れているとさみしい、不安であると回答した<sup>13)</sup>。このような母親の女兒に対する気持ちが、自らの愛情を伝えるための愛情表出行動を多く表出させたと考えられる。また、茂木<sup>14)</sup>は、子どもに対する母親の接触について、年少期の女兒のほうが男児よりも多い傾向があり、母親に対する子どもの接触については、年少期のみ男児よりも女兒のほうが有意に多かったことを報告している。茂木の調査は質問紙によるものであったが、本研究のように、実際に母親が表出した行動を観察し分析してみても、母親の子どもへの身体接触は、確かに年少期から年長期にかけて減少し、母親は、男児よりも女兒に対してより多くの身体接触を行っていたことが明らかとなった。

年長時においては、女兒の母親がほとんど世話行動を行わなくなったのに対し、男児の母親は、表出されたすべての行動について、女兒の母親よりも多く表出していた。年長時には、女兒の母親が子どもに直接触れることは極めて少なかったが、母親は、クラスへ入るための準備をしている子どものすぐそばで子どもを見守り、分離の際には別れの挨拶行動を行っていた。このことは、女兒の母親が、子どもの発達段階や状況に応じて、子どもへの関わりかけかたや、愛情の伝え方を変えていることを表していると思われる。母親が近くで子どもを見守ったり、子どもの分離をきちんと見届けたりすることで、たとえ直接に何かをしなくても、母親が子どものことを気にかけていることが子どもに伝わり、子どもが安心して集団へ入っていきけるのかもしれない。

#### 4. まとめ

本研究では、子どもが幼稚園に入園したばかりの年少時と、幼稚園では最年長である年長時の登園場面における母親の対児行動の特徴を、縦断的に分析することで明らかにした。

母親が子どもに愛情を伝えるような行動（愛情表出行動）と、子どもがクラスへ入るための準備を手伝う行動（世話行動）は、行動のレパートリーと出現割合のいずれにおいても、年少時から年長時にかけて減少、

低下した。しかし、母親が子どもとの分離の際に、手をふったり、「バイバイ」と言ったりする行動は、行動のレパートリーと出現割合のいずれにおいても、年少時と年長時における差は認められなかった。つまり、分離時の挨拶行動は、子どもが母親から教師や他児へとアタッチメント対象を切り替える機能をもつ行動と言えるかもしれない。子どもの家庭から社会への初期の適応プロセスにおいて、母親が子どもにどのように関わっているのか、母親が子どもの安全基地として機能する可能性を具体的な行動として捉えたことが本研究の成果と言えるであろう。

母親の対児行動を子どもの性別に分析した結果、年少時には、男児の母親も女兒の母親も同程度に世話行動を行っていた。しかし、愛情表出行動と分離時特有の行動は、女兒の母親のほうが、男児の母親よりも多く表出する傾向があった。女兒の母親にみられるこの傾向は、年長時においても同様であった。さらに、年長時のみに観察した「見守り」や「補助可能距離」の出現割合も、女兒の母親のほうが男児の母親よりも高かった。先行研究から、年少時の女兒の母親は男児の母親よりも、子どもと離れることに対する不安やさみしさを強く抱いていたが、そのような気持ちが、女兒に対する愛情表出行動や別れの挨拶行動として現れたと考えられる。

年長時の女兒の母親は、子どもの補助可能距離から笑顔で子どもの準備を見守り、分離の際には手をふったりして別れていた。これは、子どもが年長であっても、女兒の母親のほうが男児の母親よりも子どもと離れがたかった気持ちをもっていただためかもしれない。そして、そのような母親の気持ちが女兒に伝わり、女兒の、母親との分離を困難にさせた可能性が考えられる。いずれにしても、アタッチメント対象を切り替えるための行動であると考えられる分離時特有の行動が、女兒の母親に多く表出されたことは、女兒のほうがアタッチメント対象の切り替えが困難なためかもしれない。女兒の母親が、子どもを笑顔で見守り、分離をきちんと見届けようとする行動は、女兒がアタッチメント対象を切り替えることを促し、女兒が安心して集団に入っていくことを保証するのかもしれない。

本研究では母親の対児行動を分析したが、母親の対児行動が、子どもからの関わりかけに対応して変化することは当然のことである。例えば、女兒の中には、年少時に母親との分離を嫌がる子どもが多かったが、それらの女兒の母親は、子どもの不安をなだめるために、子どもに対してより多くの身体接触を表出したと考えられる。また、男児の母親も女兒の母親も、年少時には同程度の割合だった世話行動が、年長時にはほ

とんど見られなくなったものの、男児の母親のほうが女児の母親よりも多くの世話行動を行う傾向を示した。これはある2名の母親の男児が、他児よりもクラスに入るための支度が遅く、母親が頻繁に準備を促したり手伝ったりしたことが影響したと思われる。本研究では母親の対児行動の中に子どもへの反応行動も含まれており、子どもの行動も分析する必要があるだろう。さらに、子ども1人1人の発達段階や特徴によって母親の対児行動は異なるはずであり、母子関係は個別性が非常に強いものである。第1子であった子どもは男児より女児に多く、このことが年少時における女児の母親の子どもに対する愛情表出行動の出現を増加させた可能性も考えられる。本研究で対象とした母親は1園のわずか17名の母親であり、子どもや母親の特徴を踏まえた上で、各母子の個別の分析や、対象数を増やすことも今後の課題である。

## 【引用文献】

- 1) 数井みゆき (2006). アタッチメントの世代間伝達, 滝川一廣・杉山登志郎・青木省三編. *そだちの科学*. (pp.96-100). 東京: 日本評論社.
- 2) Harlow, H. F. (1958). The nature of love. *American Psychologist*, 13: 673-685.
- 3) Ainsworth, S. (1983). *アタッチメント: 情緒と対人関係の発達* (依田明, 訳). 東京: 金子書房. (Ainsworth, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.)
- 4) Morris, D. (1974). *ふれあい: 愛のコミュニケーション* (石川弘義, 訳). 東京: 平凡社. (Morris, D. (1971). *Intimate behavior*. Jonathan Cape.)
- 5) Argyle, M. (1988). *Bodily Communication*. (2nd ed.) London: Methuen.
- 6) Klaus, M. H., & Kennel, K. H. (1985). *親と子のまじり* (竹内徹・柏木哲夫・横尾京子, 訳). 東京: 医学書院. (Klaus, M. H., & Kennel, K. H. (1982). *Parent-infant bonding*. The C.V. Mosby Company.)
- 7) 根ヶ山光一 (2005). 母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達. *小児保健研究*, 64: 451-460.
- 8) 小島康生 (2006). 二人の子どもを持つ母親の子どもへのかかわりに関する自然観察研究—信号のない横断歩道場面での観察データから—. *家族心理学研究*, 20: 109-121.
- 9) 小松孝至 (2005). 母子の会話の中で構成される幼児の自己: 「自己と他者との関連づけ」に着目した1事例の縦断的研究. *発達心理学研究*, 17: 115-125.
- 10) 平井信義 (2003). 「心の基地」はおかあさん. 東京: 新紀元社.
- 11) 高向山 (2005) 「登園場面」における母親の行動特性の日に比較. *異文化間教育*, 21: 57-72.
- 12) 松浦あずさ (2010). 幼稚園登園時の母親の対児行動と自由遊び場面における幼児の対人行動. 広島大学大学院教育学研究科修士論文.
- 13) 権田あずさ・今川真治 (2012). 幼稚園3歳児の日常的な母子のかかわりと園生活の進行に伴う母親の気持ちの変化. *日本家政学会誌*, 63: 193-203.
- 14) 茂木寿美子 (2003). 幼児期における身体接触と自立の時期的区分. *日本保育学会研究論文集*, 56: 192-193.